

ホルヘ・テイリエルの「異界」

三角 明子

チリの詩人ホルヘ・テイリエル (Jorge Teillier, 1935-1996) は、[炉辺の詩人] (los poetas de los lares) の中心的存在として知られる。[炉辺の詩人] たちは、テクノロジーの急速な発達にともなう人間存在の希薄化へのこたえとして、チリの大地に根ざした詩世界を志向し、郷愁をひとつのキーワードとする。チリ南部出身のテイリエルはおのれの経験や記憶をうたうにとどまらず、生者と死者が共存するふしぎな神話的詩世界を構築し、20世紀のスペイン語詩のなかで独自の地位を得た。

研究報告会は二部構成で行った。前半ではテイリエルの作品世界のバックグラウンドとなるチリの基本情報およびおおまかな歴史の流れを見た。後半ではテイリエルの略歴を共有後、三篇の詩をとりあげた。

詩人・文筆家としてのテイリエルの活動は、1973年に起きたチリ軍事クーデタの「前」「後」で大きくふたつの時期に分けて考えることが可能である。本発表では、1971年出版の『死と驚異』*Muertes y maravillas* までの前半に焦点を合わせ、生者—死者—そしてそれを眺める生死も不明な「ぼくたち」という話者が登場する「見知らぬひとが森で口笛を吹く」"Un desconocido silba en el bosque" をテイリエルの [炉辺の詩] の代表例として紹介した。

さらに筆者は、[むかし] の雰囲気の色濃く漂うテイリエル第一期の詩にときおりあらわれる、未来に向かうSF的想像力にとくに注目する。第三詩集『記憶の樹』*El árbol de la memoria* (1961) におさめられた "Cuando todos se vayan" (「みんなが行ってしまうとき」) は、アメリカ合衆国の作家レイ・ブラッドベリによる連作SF小説『火星年代記』*The Martian Chronicles* (初版1950) へのオマージュであり、この詩集全体を覆う神話的無時間から大きく跳躍し、ひとびとはロケットでほかの星へと「行ってしま」う。

[むかし] またはいつともわからない時代をおもな場としながら、詩人自身が生きた時代のテクノロジーや当時夢想された未来が、どのようにテイリエルの作品世界に影響を与えているかを考えるのが筆者の目下の関心事である。また、テイリエルにとどまらず、同時代を生きたほかの詩人たちについても今後視野を広げていきたいと考える。